

地域の拠点「泊まれるジオ施設」について (株式会社 海士)

1. 背景

2021年7月、先進的な町づくりで知られる島根県・隠岐諸島の海士町に新たな観光の拠点「Entô (エントウ)」が開業した。当施設はかつて国民宿舎だった宿がホテルとなり(1994年マリンポートホテル海士に改名)、そのホテルを海士町と株式会社海士が建て替え・一部リニューアルし、宿泊施設と隠岐ユネスコ世界ジオパーク拠点施設を兼ねた複合施設へ生まれ変わったものである。

誕生の契機として、海士町では2017年に「海士町観光基本計画」を制定し、離島観光の重要施策である宿の充実、インバウンド受入等今後の需要に対応するためのホテル魅力化プロジェクトが立ち上がり、自治体を含めた検討が始まった。町では、①ホテルの老朽化が課題となっていたこと、②ユネスコ世界ジオパークの拠点となる施設(ミュージアム等)を検討していたことで、議論を重ねる中で「ジオを拠点とした宿」という計画に行きついた。県・町としても多額の投資となるため当初は一部島民の反対もあり、またコロナ禍で開業が1年遅れるといった事態も経ながら、リニューアルオープン後1年が経過した。

島根県隠岐郡海士町

- ・人口：約2300人
- ・4つの有人島からなる隠岐諸島のひとつ。
キャッチコピーは「ないものはない」。
- ・高校魅力化プロジェクトや特産品開発等、町独自の取組が注目を集めている。
- ・2013年隠岐諸島として、ユネスコ世界ジオパーク認定。



株式会社海士

- ・主な事業：泊まれるジオ施設「Entô」、レストラン「船渡来流(セントラル)亭」、売店「島じゃ常識商店」、海中展望船「あまんぼう」他
- ・体制：職員28名。他、アルバイトやインターンが在籍。

(2022年10月時点)

2. 具体的な取組内容

開業にあたり、株式会社海士の青山さんたちは“地域にとって・マーケットにとって・働く人にとってよいホテルとは？”を考え続け、手段ではなく「目的」になる宿、隠岐諸島のフラッグシップとなる宿を目指す考えに至った。施設はSeamless(隔たりや境目のないこと)、Honest(正直さ、素直さ)を設計コンセプトとし、目の前に広がるジオパークの風景そのものを感じられる空間設計が特徴である。客室のアメニティは厳選したものを最小限設置し、「なにもない」贅沢を感じられる空間としている。情報発信においても、公式サイトで

コンセプトや想いが丁寧に発信されており、宿のスペック紹介や予約機能にとどまらずストーリーとして見応えのある内容となっている。こういった発信スタイルも、取組に高い関心のある旅行者層を引き寄せ、結果的に親和性の高いお客様が増える一因になっているように思われる。

・地域とのつながり

宿泊者に案内している体験アクティビティとしては、島内事業者と連携した街歩きや E-bike、クルージング等のメニューを用意している。例えば街歩きは島民ガイドがお客様の属性やニーズを受け、内容をアレンジしてご案内できるのが強みである。食事は島産島消をテーマに、島の生産者から届く野菜や魚介など旬の素材や隠岐特産の隠岐牛や伝統調味料でもある小醬油みそなどを用いた風土を感じられるようなコースメニューを提供している。また、町では中央図書館と学校を中心に人が集まる場所を「図書分館」と位置づけ、島内の複数箇所に分館があるが、Entô 内にも分館があり、選書された本が設置され、宿泊者と島民どちらも利用できるスペースとなっている。

・ジオパークの入り口として

館内には、地球と隠岐の成り立ちや島の魅力を学べる展示室や化石が展示されたラウンジを併設し、ジオパークの入口としての機能を内包している。さらに、スタッフがジオや島の歴史を案内するプログラム (Entô Walk) があり、宿泊者に限らず島内外誰でも参加できることから、島民への学び場の提供にもなっている。

宿の検討を進める中で、「ジオパーク」の文脈が付随したことは大きかった (※)。ジオパークは隠岐諸島全体での認定であること、またブランディングや今後のインバウンド誘致を考慮し、Entô は海士町単体ではなく“隠岐諸島”の拠点として舵を切った。結果、実際に4島を周遊する例も見られ、効果を感じている。

開業決定後、島内の民宿からは、価格帯が異なり客層が違うことからネガティブな反応はほとんどなかったが、公費を使った事業に対して一部島民や近隣エリアの同業事業者からの反発はあった。ただ、宿の可能性と価値を伝え続けることで徐々に協力者が増えていった。自治体トップが最後までやりきるよう現場に任せ、方針がぶれないことが何より大きかったと青山さんは語る。

※隠岐諸島にはジオパークを統括する団体として「一般社団法人隠岐ユネスコ世界ジオパーク推進協議会」があり、その他4島に各観光協会がある。数年間の協議を経て、2022年4月、協議会と隠岐観光協会が合併し、「一般社団法人隠岐ジオパーク推進機構」が誕生。機構が隠岐諸島全体としてジオパークの発信やDMOの活動を行うことになり、これらの動きもEntôの取組とリンクしている。なお、ジオパークは4年に1度の再認定審査があり、地質の保全、地学教育、地域内での教育などの調査がある。

3. 開業1年を経て

もともと隠岐諸島は関西からの観光客が多く、海士町は関東と関西から各3割程度、またシニア層が多かった。先進地視察先として視察団体も多く、来島者の2割程度を占めている。そのような中、Entô 宿泊者は約5割が関東からで、ミドルシニアの富裕層が多い。いわゆるラグジュアリー志向というよりは、地域の取り組みや考えに共感し関心を抱いてくれた方が多いという。また新規層として、20~30代の女性が増えた。これらはSNSやテレビの影響が大きい。

宿泊者のほとんどが個人客で、団体は1割程度である。団体の比率は今後さらに減らしていき、親和性の高い個人客の満足度を高めるサービスを提供していきたいと考えている。平均宿泊数は2泊程度。できるだけ長く部屋に滞在することを希望し、ゆっくりとした時間を好み、従来の団体旅行のような行程を詰め込み過ぎない方が多い。館内図書館から本を借りて、部屋で眼前の海を眺めながらひと時を楽しむ方も多いという。アクティビティも各種用意しており、今夏、1day アクティビティを試行して好評だったことから、今後は高価格帯のオリジナルプランづくりにも取り組み、島民との交流を通じて、地域の営みに触れ、その体験からまた普段とは違った何かを得てもらえるようなプランを検討していく予定である。



4. 今後の展望

コロナ禍真っ只中での開業であったが、プレスリリースでの丁寧なメッセージ発信（いわゆるホテル開業のお知らせではなく、観光と地域活性化が繋がっていることを伝えるメッセージを発信）やメディアでの紹介も功を奏し、順調にスタートを切った。宿泊者も想定ターゲット層が訪れ、宿自体が旅の目的になることで、閑散期の稼働も順調だ。一方でお客様からは、もっと島を楽しみたいという声もいただいております。アクティビティや食、土産物等はまだまだ白地があると考えている。アクティビティやプランづくりには対応できるガイドやコーディネーター等、人材の育成も欠かせない。そのためお問合せの多い旅マエの相談を一括して受けるチームをつくり、宿スタッフ（旅ナカ）がコンシェルジュとして現地のゲスト対応に集中できる環境づくりを検討している。さらに、地域全体への経済波及効果を生み出せるよう、地域性そのものを価値と捉え、それに触れ合い、体験することが対価となるべく取組を強化していく。

そして、隠岐諸島としてインバウンドの対応は遅れていたが、コロナの収束が見えてきた今、インバウンド呼び込みにも本格的に力を入れていく。インバウンド誘致については世界

ジオパークの海外ネットワーク等も活用していくつもりだ。来年には近隣にグランピング施設が、また他の島でもホテルが開業の予定と明るい話題も増えている。これからも Entô を通して隠岐諸島全体の魅力向上と観光の波及効果向上に努めていく。

＜おわりに＞

海士町は離島における地方創生の先進的な取組の数々で、長年にわたり全国からの視察も多い地域です。そんな海士町に、既存の宿とは異なる高価格帯の宿が誕生したとのことで、来島者層に変化が出ているのか・地域の反応は？等を伺いたく、海士町移住後、観光協会職員を経て地域内の多くの取組に参画・主導され、今は株式会社海士の取締役という経歴を持つ青山さんにお話を伺いました。内容は本文記載のとおりですが、想定外だったのは「ユネスコ世界ジオパーク」の存在の大きさです。多くの地域が基本的には自地域のことで精一杯で、行政主導の広域連携はうまくいきづらいこともあるのが実情ですが、隠岐諸島ではユネスコ世界ジオパークを象徴として、地域間の連携が進み、事務局組織も変化したり、と広域連携が深まっています。再認定審査は地域の前向きかつ継続的な取組が欠かせず、今後も認定地域全体での取り組みは強化されそうです。これほどの大きなきっかけは難しいとしても、やはり地域の広域連携において、共通の象徴・目標そして継続的な取組の存在は大きいと感じました。

施設を訪問し、Entô が海士町の1ホテルとしてのみでなく、隠岐諸島・ジオの拠点として、ハード・ソフト共にそのコンセプトを貫いていることがよくわかりました。一例として敷地の囲いが全くない開放的なつくりは、島内にも開かれた存在であることを表しているようで印象的でした。取材当日、Entô 含む国内3施設を1年かけて巡り、自ら会社や地域の課題を見つけ取り組むプログラムに参加している大学生が同席してくれました。こういった新しいプログラムの検討含め、青山さんは様々な人との交流を通して視野を広げることや、兼業等を含めた魅力ある働き方の検討など、海士町の振興のみならず観光業界全体をもっと良くしたいという想いにあふれています。先進的な取組に惹かれて移住者が多い海士町は人の流動性が高い一面もありますが、島を出た人やすぐに移住は難しいけれど地域にかかわりたいといった人たちの想いやスキルも力とされるような柔軟な姿勢も参考になりました。

新たなプランやアクティビティ等も期待できる Entô のこれから、そして隠岐諸島全体の取組に今後も注目してまいります。

【取材協力先】	株式会社 海士 代表取締役 青山 敦士 様
【取材日時】	2022年10月20日
【関連リンク】	Entô (エントウ) URL : https://ento-oki.jp/

(地域振興部事業課 平田)